

待降節第2主日礼拝説教「待ち望ませる言葉の世界へ」

日本基督教団石神井教会 2017年12月10日

【旧約聖書日課】エレミヤ書 36章1～10節

1 ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの第四年に、次の言葉が主からエレミヤに臨んだ。2 「巻物を取り、わたしがヨシヤの時代から今日に至るまで、イスラエルとユダ、および諸国について、あなたに語ってきた言葉を残らず書き記しなさい。3 ユダの家は、わたしがくだそうと考えているすべての災いを聞いて、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。そうすれば、わたしは彼らの罪と咎を赦す。」

4 エレミヤはネリヤの子バルクを呼び寄せた。バルクはエレミヤの口述に従って、主が語られた言葉をすべて巻物に書き記した。5 エレミヤはバルクに命じた。「わたしは主の神殿に入ることを禁じられている。6 お前は断食の日に行って、わたしが口述したとおりに書き記したこの巻物から主の言葉を読み、神殿に集まった人々に聞かせなさい。また、ユダの町々から上って来るすべての人々にも読み聞かせなさい。7 この民に向かって告げられた主の怒りと憤りが大きいことを知って、人々が主に憐れみを乞い、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。」8 そこで、ネリヤの子バルクは、預言者エレミヤが命じたとおり、巻物に記された主の言葉を主の神殿で読んだ。9 ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの治世の第五年九月に、エルサレムの全市民およびユダの町々からエルサレムに上って来るすべての人々に、主の前で断食をする布告が出された。10 そのとき、バルクは主の神殿で巻物に記されたエレミヤの言葉を読んだ。彼は書記官、シャファンの子ゲマルヤの部屋からすべての人々に読み聞かせたのであるが、それは主の神殿の上の前庭にあり、新しい門の入り口の傍らにあった。

【使徒書日課】テモテへの手紙二 3章14節～4章8節

3 14 だがあなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだかを知っており、15 また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。16 聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。17 こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです。

4 1 神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国をを思いつつ、厳かに命じます。2 御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。3 だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます。そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、4 真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります。5 しかしあなたは、どんな場合にも身を慎み、苦しみを耐え忍び、福音宣教者の仕事に励み、自分の務めを果たしなさい。6 わたし自身は、既にいけにえとして献げられています。世を去る時が近づきました。7 わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。8 今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。

御子を迎える備えを

アドヴェントの二本目のロウソクに火が点りました。アドヴェント・キャンドルは、四本のロウソクが立てられて、四週間のアドヴェント（待降節）の間、順に一本、二本と点すロウソクを増やしていきます。そして、四本のロウソクを点して迎えた週に、もう一本加えた五本目のロウソクに火を点すというの、最近の多くの教会の習慣になりました。最後の五本目のロウソクは、アドヴェントのロウソクとは異なる「白」のものを用います。御子キリストを指し示すロウソクです。アドヴェントのロウソクに導かれて備えてきた、御子のご降誕を祝う礼拝を迎えて、初めてその「白」いロウソクに火を点します。それを、御子の到来、ご降誕のしるしとするのです。

同じような習慣で、幼子イエスのお生まれになられたという家畜小屋を再現する「クリップ」などと呼ばれる人形のセットを飾る場合があります。ご自宅に飾られている方もあるでしょう。カトリック教会では、この季節に聖堂に堂々と飾る習慣があるようです。しかも、実物大で飾るような教会もあると聞きます。待降節を迎えると、まず、その家畜小屋が置かれるのです。しかし、まだ幼子イエスはもちろん、母マリアもヨセフも置きません。もちろん、羊飼いと羊、博士と宝物も、まだ置きません。最初の週には、家畜小屋と牛や羊、そして飼い葉桶だけが置かれるのです。飼い葉桶は、まだ空っぽです。そして、週を追うごとに順に、降誕物語の登場人物が加えられていきます。クリスマスの祝いの礼拝を迎えたとき、はじめて、それまで空っぽだった飼い葉桶に、幼子の人形が置かれるのです。御子のご降誕です。

アドヴェントの四週間は、御子キリストを象徴する白いロウソクは点されず、幼子キリストの寝かされる飼い葉桶も空っぽ。そのような習慣を見てみると、アドヴェントの期間は、まるで主イエス・キリストがいらっしゃらないかのようです。もちろん、そういうことではないでしょう。降誕物語を再現するようにしてアドヴェントの期間を通して備えを重ね、クリスマスには、幼子としてお生まれになられたキリストをお迎える。それは、今、キリストがまだおいでになられていらっしゃらないからでは、ありません。キリストは、すでにおいでになりました。二千年前にベツレヘムでお生まれになられた、と聖書に物語られているとおりです。二千年前、キリストは、ベツレヘムの町のどこかの家畜小屋（実際には家畜を囲っておく洞窟だったとも言われます）で幼子としてお生まれになられ、マリアとヨセフに迎えられ、飼い葉桶に寝かせられました。そのすでにおいでになられたキリストを、わたしたち一人ひとりが迎える営み。それが、アドヴェントであり、クリスマスだと言ってもよいかもしれません。

この時期に歌う幼児の讃美歌で、ユダヤの人々が救い主の誕生を何百年も待ち続けていた、と歌うものがあります。旧約聖書にはそのような救い主メシアを待望する信仰が語られている、とも言われます。けれども、旧約聖書の信仰者たち、ことに預言者たちが何よりも待ち望んだのは、救い主であるよりは、むしろ、神の御言葉であったようです。

神の御言葉を待ち望む

エレミヤをはじめとする預言者たちは、主の言葉が告げられるのを聞くという経験をしました。どのようにしてかは、分かりません。幻を伴うこともあったようですが、そのような説明が必ずあるわけではありません。いずれにしても、預言者たちは、主の言葉が語られるのを聞いて、それを人々に告げるようにと駆り立てられたのです。

とは言え、預言者が聞き取った神の御言葉を、他の人々も同じように聞きたいと思ったか、ということになると、一概にそうとは言えなかったようです。そもそも、預言者が自分の聞き取った神の御言葉を他の人々に告げるというのは、他の人々が預言者のようには神の御言葉を聞き取っていないという状態にあったからでしょう。神が預言者だけを選んで御言葉をお語りになられた、と考えることもできるかもしれませんが、むしろ、預言者と呼ばれるようになった者たちしか神のお語りになられる御言葉を聞き取る準備ができていなかった、ということなのではないでしょうか。そうであればこそ、預言者たちは、自分は聞き取ったけれども、他の人々が聞き取ることができないままにいる神の御言葉を、どうにかして伝えないではいられないとの思いを与えられて、預言者として生きることになったのではないのでしょうか。

神の御言葉は、もちろん、預言者の時代にだけ語られたわけではないでしょう。昔も今も、これからも、いつまでも、神はお語り続けられるのでしょう。わたしたちは、わたしたちをお造りくださった神が言葉をもって、この世界と人間とに臨み、触れてくださるお方であると、知らされてきました。

もちろん、神は全知全能のお方です。全知全能のお方であるからこそ神とお呼びするのです。そうであれば、神は、言葉以外の方法でも、この世界とわたしたち人間に触れてくださることがあるのかもしれませんが。ありとあらゆる方法で、この世界においてくださり、わたしたち人間に触れてくださることでしょう。けれども、その神が、何よりも御言葉をもって、この世界をお造りくださった、わたしたち人間にお語りくださったと、古の信仰者たちは証ししてきたのです。

赤子として生まれてきたわたしたちは、最初から言葉を知っていたわけではありません。言葉を語る親や家族のもとに迎えられて、その言葉を聞き続けることによって、言葉を介して、その家族の一員となったのです。皆が同じように言葉を語るわけではないとしても、言葉は、間違いなく、わたしたち一人ひとりが何者であるのか、どこで生きていく者であるのか、どのように生きるのか、といったことを方向づけているのです。

わたしたち人間が、そのような者であるからこそ、神は、何よりも御言葉をもって、触れてくださるのではないのでしょうか。わたしたちは、自分たちの言葉におぼれ、振り回され、語る言葉を失ってしまう。そのわたしたちに、神は、真の言葉を回復してくださる。御言葉をお語りくださって、言葉を失いかけていたわたしたちに、本当に語るべき言葉、依存すべき言葉を、取り戻してくださる。そのような御言葉を、わたしたちは、心の奥底で待ち望み続けているのです。

わたしたちの飼葉桶

預言者のエレミヤは、神のお語りくださる御言葉を聴きとった信仰者の一人でした。しかし、エレミヤは、自分が聴きとった神の御言葉を、人々に直接語って伝えることができなかつたのです。そこで、エレミヤは、自分が聴きとった神の御言葉を巻物に記させた。それが、「エレミヤ書」の原型になったと言われます。

エレミヤ書に限らず、聖書はいずれも、ある時代、ある状況の中で、人の手によって書き記された書物です。その意味では、純粋に「神がお語りくださった言葉の記録」とは言えないかもしれません。「神の肉声のテープ起こし」ではないのです。けれども、それでも、わたしたちは、これを「神の御言葉」として読み、聞きます。「神の御言葉」として聞き取ろうとします。この書物の中に、神のお語りくださる御言葉の響きを、その御声を聴き取ろうとしているのです。

M・ルターは、「聖書はキリストが横たわる飼葉桶」だと言いました。聖書そのものは、あのクリスマスの物語に登場する、寒々とした家畜小屋に置かれた薄汚れた飼葉桶のようなものかもしれない。人間の手垢がついていて、見るに堪えないところもあるかもしれない。しかし、そこに神の御子キリストが横たわられている。神がおいでになられている。そこに、神の御心、わたしたちに対する愛が、収められている。旧約聖書も、新約聖書も、聖書はそのような書物なのだ。

幼子の誕生を前に、マリアとヨセフは、ベツレヘムを目指して旅しました。ベツレヘムに行かないという選択肢は、なかつたのです。しかし、ベツレヘムには、彼らを泊める宿屋がなかつた。ただ彼らに提供されたのは、薄汚れた飼葉桶の置かれた、家畜小屋だけでした。そこで、マリアは男の子を産むことになるのです。

この家族に家畜小屋を提供したのは、どんな人だったのでしょうか。心優しい宿屋の主人がいたのでしょうか。心優しかったかは分かりませんが、それでも、自分の家畜小屋を提供した者がいたのは、確かでしょう。そして、その家畜小屋で使っていた飼葉桶を一つ、赤ん坊のために空にして整えたのです。赤ん坊を迎えるために、御子キリストを迎えるために。

クリスマスを迎える備えの祈りをするわたしたちも、家畜小屋を持っているのではないのでしょうか。日々くつろげる居間のある快適な家とは別に、家畜小屋がある。わたしたちが御子をお迎えするための場所です。御子のために、明け渡して提供することのできる場所です。御子は、わたしたちが明け渡したくないと思っている快適な家の中に、いきなり上がりこんでこられるわけではありません。控えめに、貧しい客人として、雨露しのげる場所であればどこでもよいからと、訪ねて来られるのです。マリアとヨセフの懷に抱かれた者として、訪ねて来られるでしょう。そして、わたしたちの中の家畜小屋を求められるのです。

わたしたちのものを詰め込んでいた飼葉桶を空にいたしましょう。心の扉を開いて、聖書を開きましょう。飼葉桶の聖書に、余計なものを詰め込む必要はないのです。そこには、御子がおいでくださるのです。神の御心が示されるのです。神の愛が宿るのです。わたしたちの家畜小屋の中で、わたしたちの中の飼葉桶が、神の御言葉の響き渡る器となるのは、間もなくです。